

建築の自律性

— 多義的カタチによる100を見る建築の提案 —

工学研究科 産業技術デザイン専攻
建築デザイン分野 博士前期課程
2024年3月修了

米倉 捺生

主査 矢作昌生 副査 小泉隆 富田英夫

研究背景

建築の構成とは諸要素の形態や、空間の配列などを決めながら、それらを組み合わせて全体を作り上げることである。建築は形態を通して表現されるものであるため、建築は構成なしには成立しない。つまり、どの時代の建築家にとっても、形態、操作を用いることは必要不可欠なことであり、建築を構成していくうえで永遠にして基礎として存在しているといえる。

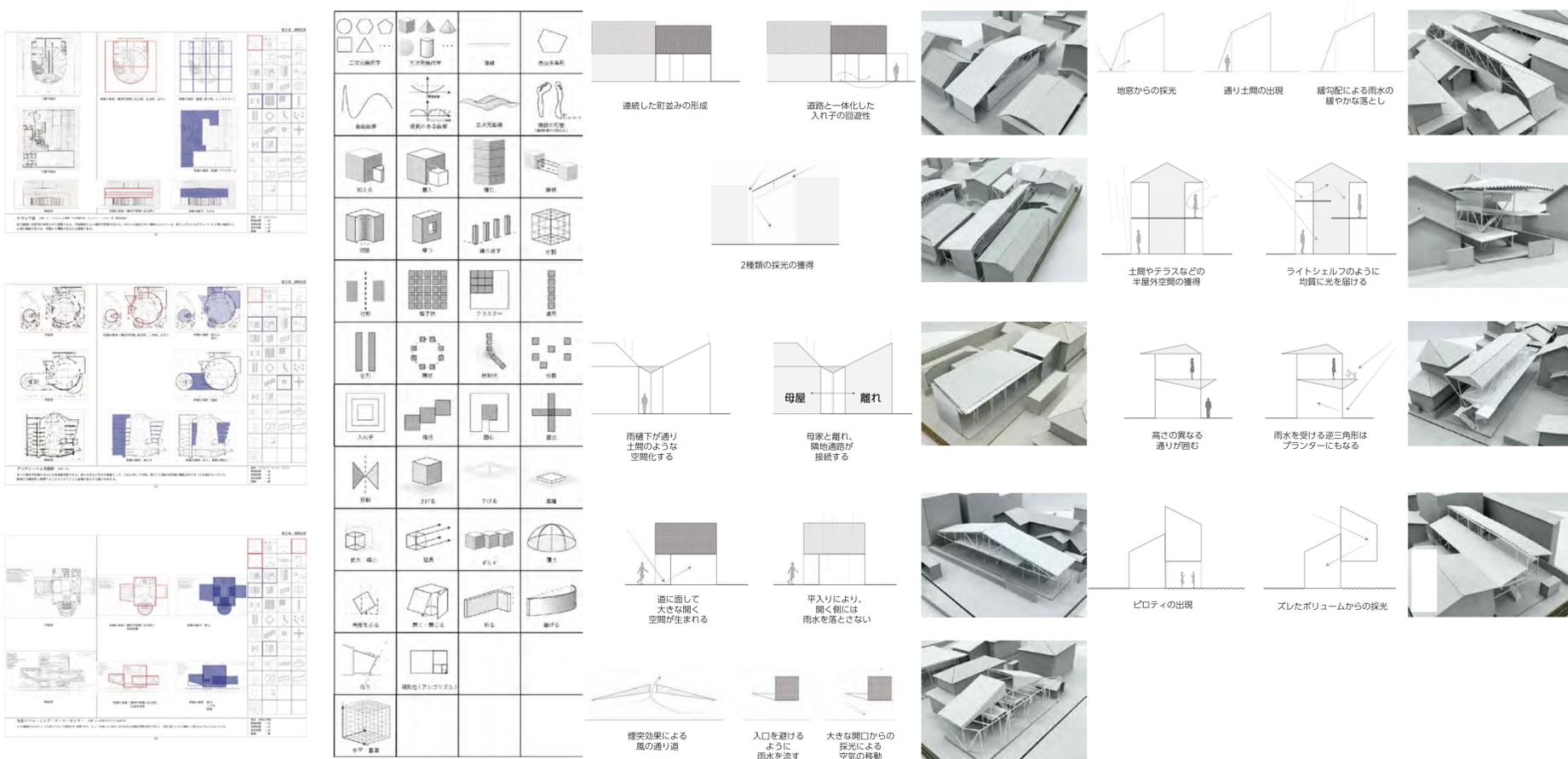
時代を横断して存在するカタチの多義性に関心を持ち、建築の価値がカタチにあると考えた。

研究目的

建築とは、どの時代や思想においてもカタチによりアウトプットされるものである。カタチは時代や思想を横断して必要不可欠なものとして存在しており、意味のあるカタチが今日も遺っている。

カタチとその性格は一对一の関係ではなく、一对多の関係があることで、建築は人間により多様な解釈がなされ自律性を獲得する。本計画では、建築におけるカタチの多義性を明かにすると同時に、建築の自律性をカタチから構成し、仮に100年後にそこに存在する建築を提案する。

研究概要



(分析)

150の建築作品の分析の結果、建築の形態は8の形態の要素、34の形態の操作、2の次元の形態言語に分類されることが分かった。この結果から今日までの建築作品の大多数はこれらの形態言語によって構成されていると考えられる。

どの時代もその中で多様な形態や周辺環境との調和、人の活動を創造したと言える。

(設計)

機能という移り変わるものではなく「雨」「風」「光」「力(構造)」「人の流れ」という変わらないものを基軸として、太宰府において100年後も変わらない価値をもつカタチを導き、建築の自律性について考察を行う。建築のカタチが多義性を持つことで、建築は機能を失ったあとも人間に対して想像の余地を与え、可能性が発見される建築になる。多義性は建築が自律化するきっかけとなり、今後100年を見る建築の骨格になると考える。

総括

本研究では、建築のカタチに着目して分析を行い、カタチの多義性による建築の自律化を考えた。

分析の結果として今日までの建築作品の大多数は限定された形態言語で説明が可能であると考えることができた。また、カタチとは国境だけでなく、意図や思想までも越えることからカタチとその意味が一对多である可能性も見られた。



指導教員コメント

近代建築(機能主義)では建築の形は機能に従うべきであるという理論が一般的であったが、永い時間軸の中では機能が失われたり、別の機能に入れ替わる事例が多く存在することから、建築の存在価値は「形」そのものにあるのではないかと仮説を立て、古今東西150の建築事例の分析を行なった。その研究成果を生かして、太宰府天満宮の周辺を敷地とし、昔から存在する町屋や町割の調査を行い、機能ではなく、光、風、人の流れ、力(構造)という普遍的な要素を基軸として、歴史ある町や建築物の文脈上に、今後100年後にもその存在意義が変わらない自律的な建築の骨格を提示した。

矢作昌生